

シャーロット・ブロンテの小説における兄弟間の確執のモチーフとその起源

古野 百合

はじめに

シャーロットのテキストにおける兄弟関係のモチーフの変容については、初期作品研究の第一人者である Ratchford(1941)や、より詳細な研究を行った Alexander(1983)が分析を試み、初期作品が後の小説に与えた影響が指摘されている。このモチーフの起源は弟ブランウェル(Banwell Brontë, 1817-48)の初期作品『羊毛は高騰する』(*Wool is Rising*, 1834)に登場するアレグサンダー・パーシーの二人息子である繊維業を営む兄とその下で酷使される弟にある。本発表では、ブランウェルの2作品、またシャーロットの未完の原稿『アッシュワース』(*Ashworth*, 1840-41)や『教授』(*The Professor*, 1857)に描かれた父親から捨てられた息子たちのプロットの変遷をたどる。

1. *Wool Is Rising*

『羊毛は高騰する』の主人公はアレグサンダー・パーシーによって捨てられた長男エドワード・パーシーで、彼が羊毛業で身を立て、政治家にまで出世し、アングリシア国の通商大臣となるまでの物語である。父親が息子を捨てる場面は、第3章に登場する。アレグサンダーは長男に続いて次男も、部下であり軍人のスデスに殺すように命じるが、スデスはその二人の息子を連れだし、殺さずに生かした。その後、彼らは様々な困難をくぐり抜けた後、兄のエドワードは羊毛梳き商会で財を築いて繊維工場を買い取り、気鋭の若手商人として業界で名を馳せるまでになった。一方、共同経営者である弟ウィリアムとティモシーはエドワードの部下として酷使された。ティモシーと違い、兄の命令に抵抗を示すウィリアムに対し、エドワードはこめかみを殴り、床に倒れて呼吸が困難になるまで殴り続けることもあった。

この理由もなく殺す目的で子を捨てる父親の心理、行動についてラチフォードは、パーシーは息子二人が自分の悪魔的特徴を受け継いだと信じていたから殺そうとしたと推論した(Ratchford, 142)。一方モナハンも、「父と息子の間における権力闘争はギリシア神話のエディプスを彷彿させるとした(Monahan, 16)。

2. *The Life of field Marshal the Right Honourable Alexander Percy*

『陸軍元帥アレグサンダー・パーシー閣下の生涯』は、『羊毛は高騰する』の翌年1835年に書かれた。『羊毛』が息子のエドワードを主人公に描いているのに対して、父親であるアレグサンダー・パーシーの生い立ちに遡り、アレグサンダーと彼の父エドワードとの確執を中心に描いている。ある時アレグザンダーは嵐の海を放浪し、2、3週間家出をした。父親は酷く叱り、今度許可なしに家出をした時は命がないものと思え、と息子を脅す。また別の場面では、息子の反抗的な態度に顔面を殴りかかろうとした父親に腹を立てたアレグサンダーは、もう一人の家庭教師で悪党のスデスから、「父親を殺せ」と扇動される。父の屋敷を抵当にキャバシヤム卿から多額の借金をし、家を出てスデスと共に放蕩生活を送るアレグザンダー。しかし、了承を得ずにオーガスタと結婚した息子を、父はスデスと共に謀して力づくで馬車に乗らせ拉致し、哲学者の島に送り込み、無理やり大学に入学させる。このスデスという人物は二枚舌の悪党で、父親と息子それぞれを扇動し陰謀を企て、父親を殺す。『閣下の生涯』における父から息子への憎悪が、息子から父に対する憎悪を招き、アレグザンダーの悪魔的性格の土壌を形成した。ノイフェルトはブランウェルの作品においてパーシーをLuciferと形容する箇所が複数あることを指摘し、またバーカーはパーシーの無神論と悪魔的化身の関係性を見出した。この悪魔的特徴が、パーシーの息子たち、とりわけ兄のエドワードに引き継がれたのではないだろうか。そして、この兄弟の確執がシャーロットの初期作品にも取り入れられた。

シャーロットは『呪い』(*The Spell, An Extravaganza*, 1834)において、エドワード・パーシーとウィリアム・パーシーが父親から忌み嫌われて捨てられたというプロットを下敷きに物語を進めている。また、また4年後の1838年に書かれた『ザモーナ公爵』(*The Duke of Zamorna*, 1838)においても兄による弟いじめを描いた。中でも、兄の虐待に耐え忍ぶ弟の姿は、『教授』のウィリアム・クリムズワスが兄からの虐待を耐える心情と重なる。その後、1841年ごろに書かれたとされる未完の原稿『アッシュワース』において、兄弟間の確執のモチーフは肉付けされて新たな様相を呈することになる。

3. *Ashworth*

『教授』に始まる本格的な後期小説への過渡期に書かれたのが、未完の*Mr. Ashworth and Son* (通称『アッシュワース』)である。この物語の主人公であるアッシュワース卿(アレグザンダー・パーシーの別名)には一人息子がいたが、父と息子の間には常に誤解が生じ、教育を与えるためにではなく、息子を遠ざけるためにオックスフォード大学にやる。亡き父の後継者となるべくアッシュワースは屋敷に戻り、結婚して二人の息子を

設けるが、赤ん坊は家畜小屋にやられ粗野な田舎の子供らと一緒に育てられた。父になったアッシュワースは息子の存在すら忘れたかのように興味を示さず、実の息子に嫌悪感を抱いていると噂される。語り手はこの嫌悪感について、「キャサリン妃（ロシアのエカテリーナ女帝）が息子であるパウロ（パーヴェル）を嫌ったのと同じ理由によるものである」との見解を示す。初期小説においては説明を必要としなかったが、過渡期に書かれた本原稿においては、父親が不自然に息子を嫌った理由を説明する必要があることを伺わせる。エドワードが18歳、ウィリアムが17歳になった時、彼らの祖母が亡くなり、経済的支援が絶たれ、ハロー校を退学する。天涯孤独になった彼らは、貧困と握手し、食べる物、着る物もままならず苦境の道を歩むこととなる。兄弟の行く末を描いたとされるのが『教授』である。そして、『教授』においては父親が不自然に息子を忌み嫌うプロットが消え、父親の病死という、より納得できるエピソードが加えられる。

4. *The Professor*

主人公のウィリアム・クリムズワスの父は工場経営で巨額の富を築いたが、亡くなる前に破産する。親戚に預けられイトンを卒業した弟のウィリアムは、商売で身を立てるべく仕事を求めて工場長である兄を頼る。そこでウィリアムは兄から度重なる言葉の、或いは身体的暴力を受ける。宴会で知り合った同じく工場主で起業家のハンズデンは、兄から虐待に抗わずに耐えているウィリアムのことを「自動人形 (automaton)」(30)と呼び、彼の中に眠る貴族的な気質を目覚めさせ、知的向上心を掻き立て、商売人として身を立てることを諦めさせようとする。兄からの虐待をウィリアムが吹聴していると勘違いしたエドワードは、弟を呼んで暴力を振るう。彼は、馬車馬用の鞭を振りかざし、鞭の先端がウィリアムの額にあたる。感情的になった兄を落ち着かせようと冷静に対応しても、兄は怒りを抑えきれず、なおも打とうとする兄の手から鞭を奪い取り、二つに折り、暖炉に投げ入れる。頭から突進して来ようとする兄を交わした後、ウィリアムはようやく兄からの隷属から逃れることを決意し、ハンズデンの紹介でベルギーで英語教師としての道を歩む。

シャーロットは初期作品において「理由もなく息子を捨てる」父親を、『アッシュワース』では息子嫌いのエカテリーナ女帝に喩え、さらに『教授』では父の逝去により息子と縁が切れるというプロットに簡略化した。またブランウェルの初期作品では暴力的な兄に焦点が充てられていたが、シャーロットの『教授』では暴力的な兄を捨て、知性と教養で道を切り開いていく弟の姿が描かれている。初期作品から後期小説へと移行する過程で、不自然さよりも自然さ、現実味を意識しようとする作家としての脱皮、成長がみられる箇所であると思われる。しかし、息子を不自然に忌み嫌うプロット、あるいは暴力的な兄にひたすら耐える弟にこそ、何かしらの現実味を感じずにはいられない。作家は、初期小説で描いてきたプロットを継承しつつ、implausibleな部分をそぎ落としてきた。しかしそこには作家が子供時代という、より直感的、本能的な感覚が鋭敏な頃に描き捉えようとしたものがあつたのではないかと思われる。

結論

作家シャーロットのオブセッションである「兄弟間の確執」のテーマは、ブロンテ第三姉妹の作品という大きな枠組みの中で検討する価値のあるモチーフであると思われる。父が息子に対し下した「邪悪で不当な裁き (black, unnatural injustice)」(Spell, 137)、また兄が弟に対して抱いた「残虐性 (savage barbarity)」(The Duke of Zamorna, 390)。これらは初期作品における空想物語の中の、いわば子供じみた想像の世界で紡ぎだした家族関係である。しかし、この家族という小さな社会において存在するパワー・ポリティクスが、ブロンテ第三姉妹らの人物造形に多大に影響し、そこから物語が大きく発展していく礎のようなものだったと考えられる。この理由もない、「不自然な嫌悪 (unnatural hatred)」(Alexander, 102)の観点から、今後ブロンテ第三姉妹の作品を眺めていくと、また新たな発見があるのではないかと期待している。

主要参考文献

Alexander, Christine. *The Early Writings of Charlotte Brontë*. Oxford: Basil Blackwell, 1983.

Barker, Juliet. *The Brontës*. London: Weidenfield and Nicolson, 1994.

Brontë, Charlotte. *The Professor*. 1857. Ed. Margaret Smith and Herbert Rosengarten. Oxford: Clarendon, 1987.

Brontë, Patrick Branwell. *The Works of Patrick Branwell Brontë: Vol 2, 1834-1836*. Ed. Neufeldt, Victor A. New York: Garland. 1999.

---*The Miscellaneous and Unpublished Writings of Charlotte Brontë and Patrick Branwell Brontë: Vol 2*.

Tokyo: Shakespeare Head Press, Kinokuniya. 1989

Monahan, Melodie. “‘Ashworth’: An Unfinished Novel by Charlotte Brontë.” *Studies in Philology*. 80.4 (1983): 1-133.

Ratchford, Fannie Elizabeth. *The Brontës's Web of Childhood*. New York: Russel and Russel, 1941.

The Brontës. *Tales of Glass Town, Angria, and Gondal*. Ed. Christine Alexander. Oxford: Oxford UP, 2000.

岩上はる子『ブロンテ初期作品の世界』開文社、1998年。